

総記

野元菊雄

「総記」の筆者は毎回、その他の各項目の原稿が出そろったところでこれを読み、その二年間の傾向をつかんでから執筆されたのだと思います。わたしもまたそうすることにして事を始めました。

そして例えば、西田直敏氏の「文章・文体」によって、この昭和五十九・六十年が、この分野で大きな高まりを見せたときであった、とか、吉田則夫氏の「語彙（現代）」でも、大きな動きが、特に現代語において見られた、ということを知りました。またもう少し詳しくは、近藤泰弘氏の「文法（史的研究）」で、古代語研究でも、テンス・アスペクト・ムードといった用語を使うなど現代語研究に見られる方向を取り入れることが多くなった、という傾向も知ることができました。

近藤氏はなお、非文法的文がなぜ不成立なのかの点から文法的な考え方が出てくる、と指摘されています。考え方はそうなのだと思いますが、果たして現在の母語以外について非文法的文というものを設定することができるか、という点については、わたしは疑問を持ちますし、つきつめれば現在の母語にもこれが非文法的文であると確かにいうことができるかという点について考えてみなければならぬと感じています。この中から文法的な考え方を抽出してくるた

めには、非文法的文と文法的文との接点のあたりが大切になってくると思いますが、そのあたりになると、非文法的か文法的か人により見解の相違がありそうです。文法的な言語変化は、すべて非文法的文が現実のものとなったものでありましょう。

以上挙げたのはほんの少数例ですが、それぞれの筆者のそれぞれの項目を大変興味深く読ませていただきました。また勉強になりましたけれども、本当のところはそれをダイジェストする能力もわたしにはないし、またそれは読者がそれぞれの項目をお読みになればそれでいいわけです。したがって読者のこの「総記」へのご期待もそんなところにはないと思います。また、いろいろな分野についてわたしがそんなことができるとは、どなたも思ってはいらつしやらないでしょう。

そこで、ここでは、別のことを述べることにします。

それは、この二年間の大きな動きとしての「文献索引」のことで

す。きっかけは、この展望号の「言語生活」を担当された井上史雄氏の「展望を執筆して気がついたことの一つに、先行の関係文献を引

照しない傾向がある。似たようなことが異つた分野の文献で研究され、立証されることがある。参照していたら視野が広がり、位置づけが違つていたと思われる例がある。」というような記述です。

また、「国語研究資料」を担当された富沢俊雅氏は、これとは少し違つた観点ですが、「資料の本来的研究は国語学から遠ざかる。「国語学者」が資料研究に深入りすることは、その存在自体が失われる危険すらある。しかし資料の「国語学的研究」にのみ終始するものも資料本来の研究としては邪道である。そのような矛盾を超越した所に資料研究は成り立つ」というような記述もそれと関係が多少はありそうです。

井上氏は、文献はなるべく広く読み利用しなければならぬ、という立場です。確かに今のところはそれとおりに思います。今は、何何についてを専門とし、それについての論文を書くからには、これこれは読んでおくべきだ、というようなものがあるようですし、ある論文については、先行論文への言及がないのはマイナス点とされます。わたし自身「国語学」の編集委員長として、委員諸氏の意見により、投稿者に、これこれの文献について言及してほしい旨コメントを出したことがあります。

しかし、このようなやり方がいつまで続くのか、ということについては疑念があります。つまり、いつかはこの態度はとり切れなくなるような気がします。

このことについて言及したのは、この「国語学」では例えば第四百四十四集の古田啓氏の「読みたい人に読まれるために」です。ここには多すぎる情報に溺れそうな状況が述べられています。

確かに、近代科学が日本で出発してから長いところで百年ほどが

経っていますが、今でさえ古田氏指摘の状況とすれば、あと五十年ぐらいのうちには、ある専門分野についての文献を一通り読み、理解し、自分のものとするために、学問生活の最初の二、三十年、ということは最も創造性豊かな若い時代が浪費とはいわれないまでも消費されてしまうことになりました。これは学問にとつての大きな損失ですから、これに対してわれわれはどう対応するか考えなければなりません。

対応策としては、いくつか考えられますが、読むべき文献を精選することが一つと、読むべき分野を狭くすることが一つです。この二つは互いに関係がありますが、まず前者について述べることにします。

読むべき文献を精選するには、データベースを整備しなければなりません。このことについては同じく「国語学」の第四百四十四集に「国語学研究文献総索引」作成委員会経過報告」があります。

この報告によりますと、この総索引作成については昭和五十七年、当時の金田一春彦代表理事から発議があつた、とあります。理事会での議を経て、「文献索引検討委員会」が設けられたのは、昭和五十八年暮れでした。この「検討委員会」から現在の「国語学研究文献総索引」作成委員会」が作られ、その第一回会合は昭和五十九年五月二十日にあり、以後その下に「実行委員会」「キーワード委員会」ができて、実際の活動が始まりました。このようなわけで、この展望号の取り上げるべき時期に活動を開始しましたから、この「総記」では当然このことについて触れるべきでありましょう。

実際の作成の費用は昭和五十九年に放送文化基金による助成金約

三百万円にこの期は主としてよっています。なお、昭和六十一年度は文部省科学研究費補助金から一千万円交付の内定があったので、大いに作業が進展すると思われれます。

さて、前記古田氏の「読みたい人に読まれるために」によれば、「国語年鑑」に載っている論文数は、年々増加の傾向がある、ということですが、これについては後に紹介するように古田氏自身のデータもありませんが、まず「国語年鑑」に載っている雑誌論文の数を、いくつかの分野等で数えた結果を表示してみることになります。

ここには四つの分野しかありませんが、それでも分野によって、増加の著しかったところが違うことがわかります。「国語史」と「音声・音韻」は50年版と55年版との間に、「語彙用語」は45年版と50年版との間に大きな増加がありました。このようにして、もし二年前ごとの傾向を見ていけば、その展望の期の特色が明らかとなると思われれます。

なお、「文法」の項は、昭和45年版が突出しています。「国語年鑑」は年度によって分野の切り取り方が違う場合がありますから、それ

国語年鑑	昭和35年版	40	45	50	55	60	60/35×100
国語史	48	41	68	41	97	121	252
音声・音韻	60	53	62	68	102	111	185
語彙・用語	100	115	128	244	371	378	378
文法	88	131	280	119	135	216	245
さ行人数	256	236	239	331	506	424	165
さ行名簿人数	166	169	181	198	215	217	131

の反映であるのかも知れません。

分野別では「国語教育」では、昭和35年版で既に千件を越す論文があるのに、60年版もそれより五十件足らずしか増えていないというのがありますし、古田氏の調べでは「文字・表記」のようにむしろ減っているものもあります。いわゆる国字国語問題では今は戦後の熱気は冷めているものと思います。

以上のこと、および以下では数だけを問題にしており、その質は議論の対象としてはいません。

古田氏の論文の量の概算は、昭和五十九年二月十八日の第二回「文献索引検討委員会」で発表されたもので、この発表のことは前記の「経過報告」にわずか六行出ています。これは公にされたものと考えるので、分野ごとの大ざっぱな概観をここに述べておきます。もとよりこれは古田氏もいわれるごとく概数の試算です。索引作成の費用を概算するためのものですから、字数で出ています。単位は一、〇〇〇字を一としたもので、「国語年鑑」の昭和29・58年版の三十冊について出したものです。

「国語学」は昭和29年版は〇・七（つまり七百字）で同58年版は一〇・五（二万五百字）。この間に十五倍となりました。一番多いのは55年版の一三・四で十九倍。

「国語史」は、一・一から六・七へ六倍。一番多いのは、この六・七の昭和58年版です。先のわたしの表と合わせてみるために同じ年度の概算字数を見ますと、昭和35年版二・八、40年版一・七、45年版三・一、50年版二・三、55年版五・九であり、多少の出入りはあるものの傾向としては合っている、といっているでしょう。

「音韻」は二・〇が五・九へ三倍、一番多いのは昭和52、53年版の七・五です。

「文法」は四・二から六・七へ一・六倍。一番多いのはわたしの表でもわかりますが、昭和45年版の一・二・九（三倍）です。この前後は43年九・五、44年七・〇、46年一・二・一、47年四・〇で、どうもこのあたりいささか突出しているようです。

「文体」は一・四から八・四へ六倍。一番多いのは昭和56版の一〇・一で七倍。

「語彙」は三・八から一五・一へ四倍。一番多いのは55年版の一六・〇です。

「文字・表記」は五・四から三・四へ〇・六倍。一番多いのがその最初の昭和29年版です。

以上まとめますと、「文法」「文字・表記」を除くとすべて二倍以上になつていて、文献の数の増加が伺えます。この七項目（分野）の合計を出し、昭和28年版から五年間ずつを足していきますと、29〜33年版九五・五、34〜38年版一三三・一、39〜43年版一五一・五、44〜48年版一九二・七、49〜53年版二二五・七、54〜58年版二八七・六となります。

すなわち、文献量は着実に増えており、特に近年はなほだしいわけて、文献の海に溺死寸前というおもむきです。

なお、古田氏によれば、30年分を分野ごと合計すると、「国語学」一八六・一、「国語史」九二・四、「音韻」一一・七、「文法」一九八・七、「文体」一六〇・六、「語彙」二四五・一、「文字・表記」八一・五となり、伸び率とは別に、字数、つまりは件数で、どの分野が盛んであったかがわかります。

昭和29年版には全くなかつたものとしては「外国人に対する日本語教育」という分野があります。これはわたしの表の範囲でいえば45年版に三十八あつて、60年版では百十となつています。

ここで、わたしの表で、今まで触れなかつた下の二行について述べることにします。

まず「さ行人数」というのは、この年鑑に登録された論文や著書の筆者索引に出ている人数です。全部を数えるべきですが、簡単にするため「さ行」だけとしました。また、一人でいくつも書かれた人もあり、一つだけの方もありますが、すべてこれを区別せず、この索引に登録した人数を単純に数えたものです。一番右の数値で示すように、35年版から60年版までに一・六五倍となりました。

次の「さ行名簿人数」は、名簿の部に登録されている人の数です。この名簿ののつている人は「国語学者」に限りませんが、この人は除外する、などということはせずに機械的にのつている人はすべて数えました。国語学者の絶対数を知るのが目的ではなく、その数の動向を知るのが目的ですので、こういう観点で見て下さい。

この名簿の方は、同じ間に約一・三倍となつたわけです。先の一・六五倍にしろこれにしろ、わたしの表の四つの分野の倍率よりは低いということになります。つまり、書き手の側の増加率よりも論文の増加率の方が高いことになりました。このことはどういう意味を持つでしょうか。

だから、論文の質が低下した、とは即断できません。昔は、不当に発表の舞台が狭められていた、ということもあり得るからです。発表されたものの質はそう変わらない、ということもありましょう。

ついでにいますと「さ行人数」の方は、昭和29年版一四〇人、30年版二二一人であり、「さ行名簿人数」はそれぞれ五四人と八八人となつています。60年版に対して「さ行人数」の方は、三倍と三・五倍、「さ行名簿人数」の方は、四倍、二・五倍です。

この「さ行人数」の倍率は古田氏の論文文字数では、58年版は29年版の三倍、30年版の三・一倍ですから、先に述べたこととは違つて一人の人が書く量には三十年間であまり差がなさそうだと、ということになります。「さ行名簿人数」の方もそう違いはありません。この観点からするならば、一人あたりの論文の量はそれほど変わらない、といえそうですが、特に名簿の方は収集の不備ということもありましょうから、わたしの表で見たように昭和35年度くらいで計算する方がいいということはいえそうに思います。

以上のことは、読むべきものを読むための論文探しの観点から述べたものです。ここではいろいろな数字を挙げて述べたのですが、実は、研究文献索引ができれば、もっと完全なものが、教多くのデータとして立ちどころに出てくるものです。この点でも総索引が早くできるよう待望します。

『国語学』第百四十四集にもありますように総索引を本当に活用するためには、各論文にキーワードをつけるということがどうしても必要です。このためにはこれから相当の努力をしなければならぬかと思ひます。

キーワードがつくと、所要の論文に到達できることにはなりますが、次にはその論文を読むべきかどうかを決定しなければなりません。全部読んで必要のない論文だったということになると時間の無駄だ

からです。

このために論文の抄録ということが、特に論文の数が多い、自然科学や工学関係では考えられています。一つ一つの論文を人間が読んで、最適な抄録を作ればいいのですが、機械にそれをさせる自動抄録をも考えなければならぬと思います。

そこまで甘やかしていいか、という論もありましようが、これはこれからの問題となります。ついでにいえば、日本語論文に欧文要約がつくのですが、これからの国語学関係でも、欧文論文に対して日本文要約をつけるべきだ、ということになりましよう。

次に読む分野、あるいは自分の専門とする分野はますます狭くなる、という点について述べます。これは、上記のような文献の洪水から逃れるためにとる自衛行動のうちの一つではないかと思ひます。そうしないととても読み切れない、というわけです。

学問の進化の一つのあらわれとして、どんなものについても専門化はますます進む、ということはいえると思ひます。だんだん万能の天才は出にくくなっています。

それはそれで仕方ないことですが、専門の枠に入ってしまった、そこからあまり顔を出さなくなる、という傾向があるように思ひます。このことについてわたしはいささかの疑問を持っています。

大学の国語・国文の学科では、専門によってあまりに非常勤講師を頼みすぎるのではないかとわたしは思っています。具体的にどの大学でこうだったというのではなく、これは例えばの話ですが、この専任の教授の専門が源氏物語だとしますと、枕草子についてはどこか別の大学の教授を非常勤講師として呼んでできます。わたしが

知っている外国の大学はイギリスしかありませんが、そこではほとんど非常勤講師というのはいません。大学の講義ならば、何とか頑張つて専任の先生が勉強していろいろな分野の講義をします。この方がその人の学問の幅が広がるのではないのでしょうか。非常勤講師に支払う手当分を専任の先生に払つて月給を高くした方がいいように思います。

もちろん、その人の書く論文はその専門分野になることは構いません。無理してここでわたしがこの文を書いているごとくには、不得意なところの論文を書く必要はありません。しかし、あまりにも専門化すると、上には「学問の幅」ということを書きましたが、「視野」が狭くなる、ということとは否定できません。

こうして、大きくは国語学なら国語学の中であるにしても、他の専門分野のことがよくわからないことになると思います。こうなりますと自分の研究していることが、国語学なら国語学全体にとつてどのような位置や価値があるのかわからないということも起こりましょう。

近ごろ多く計画されている講座ものなどはこのような各専門の相互の位置関係を明示し、それぞれの専門分野でどこまでわかっているかを示す、という機能を持つものではないかと思ひます。これは読者にそういう情報を提供するだけでなく、各項目の書き手にもその情報を提供するものでありましょう。すなわち書き手は自分の分野が他とどのような関係位置にあるかを自ら確認することができるとは思ひません。講座ものの必要性は専門化の進化あるいは深化とともにますます必要となつてくるでしょう。

その講座ものの実際の企画者、あるいは編者はどのように考えると、一般の書き手とは別の資質を持つていなければならぬでしょう。すなわち、その全分野を広く見渡して、立派な鳥瞰図が画ける人でなければなりません。専門化が進むと、個々の専門分野に深く関わつてゐる人にそれを望むのは無理となるような気がします。それゆゑ、これは鳥瞰の専門家でなければならぬでしょう。

これは一種の学問のボスです。わたしはこのような講座の編者になつたことはありませんが、一望のうちに全分野を眺めて、それぞれの人にそれぞれの分野を割り当てる、ということは特別の才能ですし、また非常に大切なことです。

今のところ、一つの分野に専門的に深く関わつて研究する方に価値が置かれていて、鳥瞰する人とその才能は不当に低く評価されているように思ひますけれども、これは考え直すべきではないかと考へます。今までは専門の分野について研究すると同時に見渡すこともできたと思うのですが、だんだんそうもいかなくなるものと思ひます。

本来はこの「総記」はそのような才能の持主が担当すべきであつたようです。

この展望号は各筆者力作を寄せられましたので、予定のページを大幅に超過しました。そこで、わたしのこの「総記」は短くこの辺で止めておきたいと思ひます。今までの文法に関する論文はすべて随筆に過ぎない、との発言も学会でありましたが、これもまた随筆的「総記」でしたでしょう。